とある少女達の物語

雪静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある少女達の物語

【Ｎコード】
Ｎ２７７５Ｃ

【作者名】
雪静

【あらすじ】
ある仲のいい二人。竜宮唯華と竜波友美が車にはねられたことから。この物語は始まってゆく

～始まり～

私は竜宮唯華（たつみや　ゆうか）何の特徴もない、普通の高校生。ただひとつ違ったのは、人よりちょっと夢見がちなことだった・・・。

「あ～あ、私もこんな本みたいな、わくわくドキドキするような日々をおくりたいな～」

・・・まあちょっと変わってるかもしれない。

「ゆーか、何してるんだ？またいつもの病気か？」

「あ、友美ちゃん・・って病気はひどいよ～」

彼女は竜波友美（たつなみ　ゆみ）。私の第一の親友である。

「唯華のは十分病気だよ。物語みたいなことなんて起きるはずないんだから」

「そうだけど・・・」

そう、物語みたいなことなんて、現実では起きない。分かってはいるんだけど・・・

「でもさ、友美ちゃんに迷惑かけるわけでもないし。それにいつか叶うかも知れないじゃん」

「叶わないから」

「う・・・。友美ちゃんのばか～！！！」

いつものように友美ちゃんとけんかして、走り出した瞬間、目の前に車が

パッパー

「唯華！！」

友美ちゃんの叫び声とともに、私の意識は遠ざかっていった。

「ここは・・・？」

目が覚めたとき私は、ベットの上に寝かされていました。

「私確か車にはねられて・・・。じゃあココは病院？」

とりあえず体を起こそうとすると、
「目、覚めた？」
不意に横から、友美ちゃんの声がした。
「よかった～。目覚まさなかったらどうしようかと思ったよ～」
「ごめんね友美ちゃん心配かけて」
友美ちゃんの顔を見た私は、あることに気がついた。
「あれ、ココ病院じゃないの？」
目の前には、病院じゃなくて、なんだか見慣れないものがたくさんある変な部屋だった。
「う～ん。わかんない」
「わかんないって、友美ちゃんどうやってココに来たの？」
なんだか難しそうな顔をしたまま友美ちゃんが答えた。
「唯華を助けようと車の前に飛び出したとこまでは覚えてるんだけど」
「！！何してんの友美ちゃん！危ないじゃんか！！」
思わず叫んでしまった。すると友美ちゃんはしれっとしたまま、こう答えた。
「車の前にいきなり飛び出す唯華が悪い」
「う・・・それはそうだけど」
まったく友美ちゃんは口だけは達者なんだから。
「ま、それで気づいたらここにいたんだけど。ドアは開かないし。蹴破ろうとしてたら
唯華が起きたっていう感じかな」
「蹴破るって友美ちゃん・・・」
まったく、ここがどういう場所かもわかってないのに、ドアを壊そうとするなんて
この人の頭の中って実は動物と一緒ではないんだろうか。
「んで、どうする？蹴破る？」
「蹴破るのはやめて友美ちゃんとりあえずもうちょっとおとなしくしてようよ」

「はいはい。じゃ、後は唯華に任せた。うちは寝るわ」
そういうと同時に友美ちゃんがベットに倒れこんできた。
「やっぱり頭の中動物だ。この人」
そうして何もせず時間だけが流れていった。

何時間たったのだろうか。私も眠たくなって、友美ちゃんと一緒に寝ていたら
不意に友美ちゃんが飛び起きた。
「どうしたの、友美ちゃん？」
「誰か来る」
友美ちゃんがそう言うと同時に、ドアの鍵が開いた。
「おや。お目覚めですかお嬢さん方？」
などというきざな言葉とともに、３人の男が入って来た
「なかなかお目覚めにならないから心配していたんですよ」
真ん中の銀髪の人がそう言った瞬間、友美ちゃんが
「テメーらいったい誰だよ。うちらをこんなとこに閉じ込めやがって」
「それは失礼。なにぶん私も、いきなり空から降ってきた人に対する。礼儀というのを知らないもので」
「空から降ってきただぁ～。何言ってやがるこのきざ野郎！」
友美ちゃーん。もうちょっと穏やかにいこうよ。
そんな私の心配をよそに友美ちゃんと銀髪男の話し合い（？）は続く

～始まり～（後書き）

初めての小説ですから、変なところなどが
多々あると思いますが、どうぞご了承ください。

～夢それとも・・・・～（前書き）

交通事故で、まったく知らないところに、飛ばされてしまった唯華と友美。
二人の前に現れた男達はいったい・・・

～夢それとも・・・・～

「空から降ってきた？」
私はそう問い直した
「どういう意味ですか」
自分を落ち着かせるように、ゆっくりと聞いた。
「そのままの意味ですよ。あなた方は、今朝私達の上にいきなり振ってきたんです。私達は・・・」
そこで友美ちゃんが、言葉をさえぎった。
「んなわけあるか！唯華こんなやつでたらめ言ってるだけだから信じちゃだめだよ」
「友美ちゃん、ちょっと黙ってて」
「唯華・・・！」
友美ちゃんはなにか言い返そうとしたけど、あきらめてそっぽを向いた。
「続きをどうぞ」
「どうやらこちらのお嬢さんはまだ話しがわかるようだ」
銀髪の男はこちらを向いて笑顔でそういった。その時私の目に思いもよらぬ光景が飛び込んできた。
「目が・・・・赤い？」
そう、銀髪の男は、目が赤かったのだ。ただ赤いだけでなく、まるで眼の中に宝石が入っているような、美しい色だった。
「何を言っているんですか。目が赤いのは当たり前ではないですかでも・・・あなた方は違うようですが」
そう銀髪の男が言った瞬間、めんどくさそうに部屋の前にいた２人の男が、いきなりこっちを向いた。
「おい、もしかしてあのガキども・・・」
「あぁ、まちがいねえブラックパールだ」
男達がブラックパールといった瞬間銀髪の男が男達のほうを向いた。

「ちょっとお前ら出て行け」
一瞬の静寂の後
「何言ってんだあいつらの正体すらまだわかってないのに」
「いいから行け」
男達は何かぶつぶつ言っていたけどしぶしぶ出て行った
「あの、どうしたんですか」
いきなり銀髪の人の雰囲気が変わったので、私は恐る恐るきいてみた。
「え、いえ何でもありませんよ。そういえば自己紹介がまだでしたね。私の名前は双樹裕也（そうき　ゆうや）と申します」
「あ・・・、ご丁寧にどうも私は竜宮唯華と言います。あっちは私の友達で竜波友美ちゃんです」
友美ちゃんの名前を言い終えたときに裕也さんはなんだか深刻そうな顔でつぶやいた
「双つの竜がこの世に現れるとき、世界は破滅か繁栄のどちらかを選ぶ」
「え」
「あ、いえ。唯華さんと友美さんですね。よろしくお願いします」
「あ、はいこちらこそ」
何がなんだかわからないまま私は裕也さんと握手をしていた。
その横で友美ちゃんは、食い入るように裕也さんをみていた。まるで何か得体の知れないようなものを見る目つきでみていた。
私はそんなもにまったく気づかず裕也さんに私達がなぜここにいるのかを聞いていた。
「あなた方は、今日私達があるものを呼び出そうとしたらいきなりあなた方が空から降ってきたんです」
「何を呼び出そうとしていたんですか？」
「龍です」
私は友美ちゃんが笑い出さないことを願ったが、その願いもむなしく
「ぷっっ、あはははははははははは」

友美ちゃんは笑い出した。
「ちょっと友美ちゃんそんなに笑ったら失礼だよ」
「いえ、いいんですよ。確かに笑われるようなことをわれわれはやろうとしているんですから」
「ならどうしてそんなことやろうとしているんだよ」
友美ちゃんがそういった時裕也さんの目が悲しい色をともした。
「われわれの国は今壊滅の危機にさらされています。それでどうにかしようと考えた私達はある情報を耳にしました。それは龍に仕えていたとされるある2つの家に代々伝わってきた言い伝えで」
「「双つの竜がこの世に現れるとき、世界は破滅か繁栄のどちらかを選ぶ・・・」」
「え」
友美ちゃんと裕也さんの声が重なった。
「何で友美ちゃんが知ってんの？」
「さっきこいつが言ってたし、第一うちと唯華の家に古くから伝わってんじゃんか」
そうだったんだ・・・
「これはこれは、まさかあなた方があの家とつながっていたとは、驚きました」
その顔はぜんぜん驚いてないし、それより
「私達にその家の場所教えていただけませんか。早く家に帰りたいんで」
「それは困りましたね。あの家はだいぶ昔に敵国に破壊されてしまいましたし」
え・・・・。いきなりの爆弾発言。私たちの家は確かにさっきまであったはずだし。
何かがおかしい。私達はいったいどこに来てしまったのだろう

～夢それとも・・・・～（後書き）

展開が速すぎるかもしれませんが、とりあえずここまで付き合っていただきありがとうございました。
このあと唯華と友美の行動を楽しみにしていてください

～現実だった～

私達は帰る家もないので、とりあえずそのまま裕也さんの家にいさせてもらうことになった。
話を聞いてるうちにだんだん今の状況が飲み込めてきた。
ここは私達がいた時代より大体千年くらいたっていて。今世界は大きく分けて４つに分かれている。一つ目は世界を自分達だけのものにしようとする塊（ここの世界では、国のことを塊というらしい）二つ目は全人類を滅ぼそうとする塊（どうやらここには人間以外の生物も、結構高い知力を持って動いているようだ）三つ目は戦わずに世界をまとめようとする塊。
四つ目は自分達の国を守ろうとする塊。裕也さんたちは、四つ目の塊らしい。
そしてここの世界では、目がみんな赤い、そして黒い目（私たちのことね）はブラックパール
と呼ばれて、いろいろな人に狙われるそうだ。（なぜ狙われているのかは教えてくれなかった）だから私達は周りに注意していたほうがいいらしい。そして最後があの言葉。
「双つの竜がこの世に現れるとき、世界は破滅か繁栄のどちらかを選ぶ・・・」
これは、この世界に古くから伝わる言葉らしい。（まあ、私達の家にも、先祖代々伝わる言葉といわれてるからかなり古いんだろうけど）ここの世界の人はほとんど本気にしてなくて
裕也さんたちみたいなごく一部の人がそれを信じて呼び出そうとしているらしい。裕也さんが言うには、これは人間の姿をしてたまに、こっちの世界に来るそうだ。そしてその人の姿をした竜は、必ず名前の中に竜という文字を入れるらしい。（なぜ竜とわかったかというと、その人？たちは必ず歴史に残るような人のそばに出てきてその人が成功するように導くそうだ）

失敗したら破滅だけどこれ以外にはこの世界を救う方法はないそうだ。何でもほっといたら
それぞれの塊が互いを攻撃しあって、最終的にこの世界を滅ぼすそうだ。
それでその竜を呼び出そうと色々していたら、私達が降ってきた・・・。
なんだかわかったようなわからないような。とりあえず友美ちゃんと話し合って、今からどうするかを決めた。
とりあえず帰る方法がわかるまで、裕也さんの家に泊めてもらう。

私は絶対友美ちゃんのそばを離れない。（友美ちゃんが言うには、「唯華は一人だと絶対何かややこしいことに巻き込まれるから」だそうだ。まあ、なんか私達はブラックパールとか何とかいうので狙われてるらしいけど、私も自分の身くらい守れるもん・・・・・たぶん）
とりあえず、この二つは絶対だということになった。裕也さんの家に泊まるのはもう許してもらったし、私達はとりあえずこの世界に住むことになった。

～現実だった～（後書き）

すみません。ぜんぜん話的に進んでません。
この話はとりあえず、主人公が現実を認識していく様子ということで理解お願いします。

～失敗～

私達はじっとしていても仕方ないので、とりあえず裕也さん達の町に出かけることにした。
裕也さんはちょっと驚いた顔をしたけど、笑顔でだしてくれた。でも条件があって、その条件とは、ボディーガード（見張り？）として柳原　剣斗（やなぎはら　けんと）さんも一緒に行くということだ。これについては友美ちゃんがいやそうな顔をしてたなあ。あの人もともと行動を制限されるのかなり嫌ってたし。私はいいんだけどね。どっちかというとちょっと有名人になった気分で、なんかうれしいし。
町に出た私達はびっくりした。誰も町の中を歩いていないのだ。家や店の中では、確かに人がいるのに、人が家から出てくる瞬間に消えるのだ。剣斗さんがいうには、ここ数年の間で文明もかなり発達していて、わざわざ太陽光の下を歩くことがないようだ。健康的にいいのか悪いのか・・・。まそれはおいといて、とりあえずドアから出るときに、行きたい場所を思い浮かべると、そこの玄関にたどり着けるらしい。なるほど、だからさっき街を見たいといったときに、裕也さんが驚いたのか。私達はいまさらどうすることもできず。おもいっきり注目を浴びながら店内に入ったのであった。
その店は、雑貨屋だった。ここでは、何を売るか決めてない店がほとんどなんだそうだ。
私達はここのお金を持ってなかったから、店内を診ることしかできなかったけど、それでも十分楽しかった。人型ロボットなんてのもあって、その場その場にあわせて本当の人間みたいに動くのだ。他にもアクセサリーコーナーは、簡単な質問に答えるだけで、その人の好みに合わせた物を持ってきてくれたりした。このときでてきたのは、十字架のネックレスだった。
このとき剣斗さんが、友美ちゃんとおそろいで買ってくれたんだよ

ね。これはかなりうれしかった。友美ちゃんはつけるのを嫌がってたけど、つけてくれた。雑貨屋の中にはまだまだあったけど、もう帰らないといけないと剣斗さんに言われて帰ることにした。帰りは入り口にあるワープを使うことにした。行きたい場所を思い浮かべながら出て行くだけでいいそうだ。

私は裕也さんの家～。と唱えながら入り口を通ろうとした時、剣斗さんの静止する声が聞こえた気がしたが、もう遅かった。ひゅっと言う音が耳元でして一瞬のうちに景色が変わった。でもそこは全く見覚えのない草原だった。私はあたりを見渡したけど、自分以外に人を見つけられなかった。

「友美ちゃん。剣斗さん？」

不安になって二人の名前を呼ぶが、返事はかえってこない。どうやらワープのときに私一人だけ違うところに飛ばされてしまったようだ。パニックになりかけたとき近くでガサガサという音がした。

「友美ちゃん！」

私は友美ちゃんが迎えに来てくれたと思って音のほうに呼びかけた。しかし次にでてきたのは、友美ちゃんではなかった。でてきたのは言い表しようのない化け物だった。裕也さんの声がよみがえる。

―ここの世界には人の形をしてないものもいる。そいつらには理性というものが全くないんだ。絶対近づいてはいけないよ―

すみません裕也さん。なんだかもう逃げることもできなさそうです。その化け物が近づいてきたとき、唯華は意識を失ってしまった。

～脱出～

―ここは？―
目が覚めると真っ暗なところにいた。起きようとしたとき、何かが向こうから近づいてくるのがわかった。私は慌てて目を閉じて、気が付いてないフリをした。
「ん～…？…が例の…なのか？」
「ソウ、блШミタ。」
「そうか。よくやった。後で褒美をやる。下がってろ」
何か会話のようだが、あまりよく聞こえない。その上一つは人の声ですらなかった。物音が近づいてくる。できるだけ起きているのを気づかれないようにしようと思った。相手が油断していたら、逃げれる可能性があると思ったからだ。しかし、
「…ったく。おい、何時まで寝たふりしてるつもりだ？」
「にゃーー！？」
突然耳元で声がして叫んでしまったしまった。
「にゃーー！？って猫かお前は。」
そこにいたのは私の兄。竜宮　智流（たつみや　ともる）だった。
「へ？お兄ちゃん？何でここに？って言うかふけてない？」
「はぁ。お前は馬鹿か？ここはお前がいたときから大分たってるんだぞ。そりゃ俺だって年をとるわ。不老不死じゃないんだから。」
お兄ちゃんはそう答えたけど。ふけたというのは、間違いだったかもしれない。ちょっとひげが生えて、少しやつれた感があるけど。見た目はそんなに変わってない。あれ？
「ちょっと待って。ここは私が住んでた時代より千年ぐらいたってるんだよね。お兄ちゃんがいたらおかしいんじゃないの？」
そうだ。普通の人間なら生きてるはずは無い。何かがおかしい。

「えーと、アナタハホントウニオニイチャンデスカ？」
・・・・・。沈黙。いやぁ、いきなり黙りこまれると気まずいなぁ
（軽く錯乱中）
「何いきなり片言になってんだ。第一なぜお前がここにいる。今までいったいどこに行っていたんだ。」
「・・・・・・・・（あ～。この返し方はお兄ちゃんだ。しかもちょっと機嫌悪い？ここはおとなしく答えとこう）裕也さんの家」
裕也さんの名前が出た瞬間おにいちゃんの目外大きく見開かれた。
「裕也って、まさか双樹裕也か！？」
「・・・・・・・？そうだけど？」
そういった瞬間お兄ちゃんは大きくため息をついた。
「この馬鹿妹が・・・。俺の今までの苦労はいったいどうしてくれる」
いやいやいや。私お兄ちゃんに苦労かけた記憶無いんだけど。
「とりあえず。お兄ちゃんなんで生きてんの？」
「ん～？悪魔に魂売ったから」
「・・・・・・・・はいーーーー！？」
「あ～嘘嘘。人魚の肉食ったから」
いやもっとありえないし。なんだこの兄。とうとう頭でも狂ったか。いやもしかしてお兄ちゃんのフリした。別の奴なんじゃ・・・。
「お～い唯華戻ってこーい。今の全部嘘だから。いまどきこんなの信じるか？相変わらずいい反応するなぁ。っていうか抜けてるのか。」
お兄ちゃんはかなり愉快そうに笑い出した
プッチン（唯華の何かが切れた音）
「いい加減にしろー。このクソ兄貴！！こっちが「叫ぶな！！」ん～！？」
いきなり口をお兄ちゃんにふさがれてしまった。耳元でお兄ちゃんがひそひそと話してくる。
「あのな～。一応ここあの化け物たちがいんだぜ。騒ぐと集まっち

まうだろ。」
私はそこで一応私は捕まっていることを思い出した。
「俺はお前らと一緒で時間移動してきたんだ。俺らの家系にゃそういう力を持った奴がまれにいるらしい。それよりあんまりここにいると危険だからな。早くもとの世界に返れ」
何時に無く真剣な目つきでおにいちゃんが言った。
「・・・。どうやって戻ればいいの。帰り方わかんないんだけど」
「俺が返してやる。この世界では一応過去に戻れる装置があるからな。竜宮家と竜波家の者しか使えないが、な」
え・・・？帰れる？元の世界に？本当に？

～脱出～（後書き）

いやぁ～とうとうクライマックス！？なんちゃって。すみません更新送れちゃって・・。とりあえずここまでお読みくださってありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

～帰還～

帰れる。元の場所へ。
今確かにお兄ちゃんはそう言った。でも・・・・。
「だめだよお兄ちゃん。今帰ったら友美ちゃんを置いてくことになっちゃう。」
そういうとおにいちゃんは驚いた顔をした。
「友美ちゃんもやっぱきてんのか」
「うんそうだけど・・・どうしたの？」
「畜生。遅かったか、いやまだ間に合うか？」
「だ～か～ら～。どうしたのお兄ちゃん！？」
お兄ちゃんはいきなりぶつぶつ言い出した。うん。壊れちゃったのかな。あ、それともあの化け物と一緒にいたから、ちょっとおかしくなっちゃったとか！？う～それでもお兄ちゃんはお兄ちゃんだからね！？私は見捨てないと・・・思う。
「トモル、ドウシタ？」
私の思考もおかしくなってきたとき声が聞こえた。さっきの化け物の声だ。うわさをすれば影とはまさにこのことだね。
「やばい。もう時間が無い。お前と友美には悪いが、いったんお前には帰ってもらうぞ」
「へ、お兄ちゃんいったいなに言って・・・」
「ここのことを親父に話すんだ。後は親父がどうにかしてくれるから！！」
それだけ言うとお兄ちゃんはポケットから丸い玉を取り出した。
「我、竜宮智流なり。わが名においてこの者、竜宮唯華をあるべき世界に返したまえ！！」
智流が唱え終わると同時に唯華の周りを白い光が覆った。
「～～～お兄ちゃん！？」
「悪いな唯華。今はこうするしかないんだ」

光が消えるとそこにはもう唯華の姿は無かった。
「トモル、ブラックパールハ？」
化け物が現れ智流に話しかけた。
「行ったよ。元の世界にな」
唯華。早いとこ真実を知ってくれよ。俺はまだ動けねぇからな。それにしても優也か・・・。また厄介な奴に目つけられやがって。

「まぶし～！！お兄ちゃんいきなりなにすん・・・・・え？」
いきなり目の前が真っ白になったと思ったら周りはあの洞窟の中じゃなかった。車、人、自転車、町。・・・・・元の世界だ。
―親父に聞け―
お兄ちゃんの言葉が頭の中に響いた。私はどうしていいのかわからないまま家に帰った。
「お父さん！！どこ！！」
家にはいるなり私は大声で叫んだ。お兄ちゃんが行ってたことが本当なら、お父さんが何か知ってるはず。早く友美ちゃんのところに戻らなきゃ。
「どうした。唯華」
「あ、お父さん。未来に行くにはどうしたらいいの！？」
お父さんはいきなり険しい顔になった。あれいきなりすぎたかな？
「お前、学校サボったと思ったら、いきなり何を言い出すんだ。妄想は頭の中だけにしろといつも言ってるだろ」
え、あぁそうか。私があっちに行ったのは通学中だっけ。くそぅお兄ちゃんめ。帰すなら1ヶ月ぐらい経たせてから帰せよ。そっちのほうがすんなり受け入れてくれたかも知んないのに（無茶言うなよ）
え、お兄ちゃんの声が聞こえた気がする。・・・ま、いっか。
「それより、妄想じゃないの！実はー」
私は、話し始めたトラックにはねられそうになったことから優也さんに会ったこと。そしてお兄ちゃんに会ったこと。全部話すとお父さんは納得したような顔になった。

「そうか。とうとう行ってしまったか。あの世界に。よし全部話してやろう。竜宮家と竜波家の役目のことを・・・。ついて来い唯華」
「う・・・うん」
そういうとお父さんはいつもは入ってはいけないといっている部屋に入っていった。
「まず最初に言っておく。お前が行った世界は未来だけど未来じゃない。我々の先祖が作った世界だ。簡単に言うとパラレルワールドとかいうところだ」
お父さんいきなり問題発言。こんな人だっけ？

～帰還～（後書き）

や～。だんだん訳わかんなくなってきた。お父さんかってに重大発表しないでください（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2775c/

とある少女達の物語

2010年10月21日07時38分発行